
「悠とゆん」

夢狩人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「悠とゆん」

【著者名】

夢狩人

N4814E

【あらすじ】

普通の高校生活を送っていた僕は、あの日やんに会ってから普通ではなくなってしまったんだ。

ある晴れた夏の夜、眠る前にかけた音楽で僕は目を覚ました。時計を見ると12時を少し過ぎた頃だった。

無造作にかけてある洋服から素早く選んで着替え、ひつそりと静まり返った夜の町へ出て行つた。

僕の名前は悠。

世間では進学校ともてはやされる高校に通う2年生だ。なぜか小さい頃から夜の持つ静けさが好きで、それは大きくなるにつれて強くなつていつた。

今では夕方から寝ぼして、夜になつたら町に出て、夜の持つ独特な雰囲気を楽しむ事が生活の一部となつていた。

長い下り坂を下つて気の向くままに自転車を滑らせていくと、妙な公園に行き着いた。

高校に入つてからずっと町に出て続けていたのに、こんな場所は今まで一度も行つたことがなかつた。

その公園の持つ不思議な魅力に誘われたのだろうか、僕は何の迷いもなく公園の中に入つていつた。

自転車を降りてブランコに乗りながら、いつもの様に夜の雰囲気を満喫していた。

いつもより一段と月が鮮やかに輝き、すべてがいつも以上の夜だつたが、風だけはいつもとは違つていた。

第三話 出会い

一時間ほどその公園の夜を満喫して僕はブランコを降りた。すると、あの嫌な風の突風と共に後ろの方で何かが落ちる様な音が聞こえた。

振り返つて見てみると小柄な高校生ぐらいの背丈の人が倒れていた。

「アイテテ・・・・

そう言って起き上がり、辺りをキヨロキヨロ見回していた。僕に気付いていないのか、自分の服の汚れをはたいて僕のそばのベンチに座つた。

声から推測するに男だと思うが、その彼は江戸時代頃の様な着物を着ていて、髪を後ろで束ね、その髪は腰の辺りにかかるほど長かった。

「あ、あの。」

と、僕は話しかけた。

彼は驚いた顔をして言った。

「お前、俺が見えるのか？」

「え、もちろん見えますよ。もしかして、幽霊・・・？」

彼は笑つて答えた。

「幽靈なんかと一緒にしてくれんなんよ。」いつ見ても、八百万の神の一人なんだからよ。」

いきなり神様であると言われ、僕はどう答えていいか分からずただただ驚くばかりだった。

「まあ、驚くのも無理はないか。けど、信じてないのは癪だな。」

そつと彼は何か呪文の様なものを唱えて僕を指し、そのまま上空に指をすらした。すると、僕の体は浮き上がり、そのまま彼が指したところまで浮かんでいった。

「お、おい。降ろしてくれよ。」

すると、彼はニヤニヤ笑いながら

「信じたか？」

と、言った。

「信じる。信じるから早く降ろしてくれ。」

僕はすぐる様に言った。

彼が元の場所を指すと僕は静かに降りていった。

どうやら、本当に神様の様だが、なぜ、こんな所にいるのだろう。ぼくはまだニヤニヤ笑いを続いている彼に尋ねてみた。

「どうして、八百万の神様がこんな所にいるんですか。」

「実は下界に降りる時、ちょっとへマをしてしまってな。」

彼のニヤニヤ笑いは照れ笑いに変わった。

「いつもはこんなへマなんか滅多にしないんだけどな。そんなことより、お前はなんで俺の事が見えるんだ?」

「え?誰にでも見えるんじゃないんですか?」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4814e/>

「悠とゆん」

2010年10月12日01時19分発行